

地方で刊行された出版物を電子化して全国展開する試みが活発になってきた。地方出版社は規模が小さく、これまで輸送費などのコスト、地理的な制約から販路の拡大は難しかったが、電子書籍はこうした足枷を取り払う。それぞれの土地の魅力を広く伝えるための格好のツールになっている。

1982年に創刊され、沖縄の歴史や文化に関する著作がそろった「おきなわ文庫」シリーズ。地元印刷会社の出版部門が刊行していた同シリーズは2001年以降、絶版状

活字の 海で

態だったが、12年に電子書籍として復刊した。同シリーズ計96点のうち、現在までに87点を電子版で刊行した。電子書籍版を手掛ける、おきなわ文庫（那覇市）の秋山夏樹代表は「この文庫で全国の人々に沖縄の文化をより深く知ってもらいたい」と話す。

同じ沖縄県の出版社、近代美術（南風原町）も11年5月に電子書籍販売サイト「沖縄eBooks」を開設し、地元書籍の電子化に力を注ぐ。貴重なのは、終戦から72年の本土復帰までの過程、復帰後の島の姿を克明にとらえてき

「地方発」電子書籍が活況 コスト抑え全国展開

た58年創刊の雑誌「オキナワグラフ」（新星出版）の復刊版。創刊号から79年12月号まで約250点を電子化した。

沖縄の飲食店や観光施設などを紹介する近代美術の新書「沖縄100シリーズ」も、電子版約50点を刊行した。同社の榎本伸司氏は「紙では県内販売のみだったが、電子化で販路が広がった。輸送・印刷コストも大幅に抑えられる」と、利点を強調する。

電子書籍に活路を見いだす動きは全国的に広がりつつある。北海道では昨年6月、出版社などが「北海道デジタル出版推進協会」を設立し、道内発行の出版物約320点を電子化した。まずは道内の図書館向けに納入し、今年秋以降、全国展開する。島根県の書店、今井書店（松江市）やイー・ピックス出版（岩手県大船渡市）なども、電子書籍の販売に積極的だ。

宮崎南印刷（宮崎市）は、無料の電子書籍サイト「Japan ebooks」を開設し、注目を集める。宮崎、京都など13府県の5千点以上の出版物が無料閲覧できる。「電子書籍を入口に紙の需要を掘り起こしたいと考え、無料にこだわった」（同社）

独自色を打ち出しながら多様化する「地方発」電子書籍は、苦境に陥っている出版業界に新たな風を吹き込みつつある。（文化部 岩崎貴行）

2014年3月2日（日）

日本経済新聞